

# お わ り に

理事 浜松 照秀



近代的なエネルギー利用は16世紀半ば英国を救った石炭に端を発する。爾来膨大な化石燃料需要を起し、資源争奪の歴史に加えて地球温暖化問題という人類全体でないと背負えない「新しい十字架」を出現させた。京都会議(1997年)で人類共通の十字架であることを認識した意義は大きい。将来の削減目標や方策の議論の段階で経済活動基盤そのものを争う図式に変わりつつある。

この問題が炭素量の少ない燃料種にシフトするといったイージーな対応で済むほどわが国のエネルギー事情に余裕はない。今日のエネルギー専門家は、エネルギーの

ためにヒステリックに戦禍をくぐった経験を、自らの努力に反映していくことが重要と考える。

今後数十年の時代の困難に解を見出すために、原子力・再生可能エネルギー、天然ガス、石炭により、安価でバランスのとれた強靱なセキュリティ確保に向けた、Breakthroughが重要である。技術オリジナルは経済のセキュリティに不可欠である。石炭IGCCを、オリジナルを軽視しがちな第三者の評論の材料にならないように、必要な技術として「使える」ものに仕立てるエンジニアの使命感に委ねたい。

一つの発電技術は一人の人間の理解を超える巨大な技術体系である。したがってIGCC技術開発の進展に伴って専門家(集団)から専門家(集団)へ技術移転に特段の配慮が重要である。取得したノウハウ・成果を受け取る身になって渡す努力と、満点であろうはずもない成果報告を受け取って「使える」技術にすることが、エンジニアにとって独創の旗手となる道と考える。

本レビューは、IGCC技術の礎としてこれまでの成果をなんとか系統的にまとめたもので、大方の叱正をいただきながら、技術の実証・確立に役立てていただけたら望外の喜びである。